

大宮まぐろ新聞

Vol.008

2021年9月1日発行

OMIYA LIBRARY

ニューシャトルがぐるりとJACK大宮

ニューシャトルはJACK大宮をぐるりと巡った後、新幹線と平行に走ります。6分間、成のかわいいうちで最高速度は60km/h!

平成18年に市民が選定した「大宮二十景」の第8弾は「JACK大宮とニューシャトル」です。

JACK大宮は、プラネタリウムやオフィスなどで構成される情報文化のビジネス拠点として、昭和62年にオープンしました。今回はJACK大宮内にあるさいたま市宇宙劇場にお邪魔して館長の東原さんと、総務広報担当の木島さんにお話を伺いました。

—新型コロナウイルスの影響はいかがでしょう—

今(7月20日)インタビュー時はプラネタリウムの放映回数を減らしているのですが、1回の放映に対する人数は以前よりも増えてきています。

↑「星をみる会」の様子
天体望遠鏡を使って、夜空を観察します。ふだん肉眼では見えにくい星が見えると思うとワクワクしますね!

秋は皆さんご存知の「中秋の名月」がおすすめです。昔から日本の文化として月を愛でるという風習がありました。さらに、今年の秋は木星や土星など明るい惑星がよく見えます。月や惑星は星を形作る天体と違っていて、その年によって見え方が変わるので、今年は特におすすです。実は、秋の星空は明るい星が少ない時期なので、星空が一番賑やかなのは空気が澄んでいる冬で、一等星であるベテルギウスやリゲルを持つオリオン座をはじめ、おおいぬ座のシリウスなど、明るい星がたくさん輝いています。

1月に一度開催されている「星をみる会」とはどのような内容ですか

宇宙劇場の屋上にあがって望遠鏡や双眼鏡で天体を見るプログラムです。月のクレーターはくっきり見えますし、土星の輪・木星の縞模様まで見えます。星は市販の双眼鏡でも結構見えるんですよ。火星は季節や日によって見え方が変わるので面白いです。その他、星雲や星団も見えやすいものを狙って見ていただいています。ただ星を眺めるのではなく事前にプラネタリウムでこれから見る天体について解説員が話をする学びの場を設けています。毎月多数の応募があり大変人気です。

10月の星をみる会
10月16日(土) 19時~20時
「秋は月見」月のごぼろを見よう!
事前にはがき申込(9月17日(金)必着)
11月の星をみる会
11月27日(土) 19時~20時
「肉眼で見える一番遠い天体」
アンドロメダ銀河に挑戦!—
事前にはがき申込(10月22日(金)必着)

さいたま市宇宙劇場
さいたま市大宮区観町682-2
開館時間 8平日13:30~17:30
土日祝9:30~17:30
休館日 水曜日・祝日の翌平日(夏休み期間を除く)
年末年始臨時休館日
TEL 048-647-0011

~「星をみる会」スケジュール~

—若田光一さんが名譽館長でいらっしゃいます。最近のエピソードはありますか

昨年、本気で宇宙飛行士になりたい子どもたちと若田さんをインターネットで結び、対談してもらったというテレビの企画がありました。当館には、日本宇宙少年団といった支部の事務局があり、団員活動の紹介とともに、団員の高校生と若田さんとの対談が行われ、テレビ放映されました。また、毎年若田さんから未来の手紙を宇宙飛行士を目指すお子さんに向けたエールをいただいていたビデオメッセージとして宇宙劇場で流しています。

2017年から新しい放映システムに変更されたのですが、今までとどのように違うのですか

今までは光学式のプラネタリウムでしたが、リニアアール後は光学式に加え、全周デジタル映像映写機を導入しました。それにハイブリッド方式のプラネタリウムとなったことで、デジタルの表現力と光学の美しい星を高精細に放映できるようになりました。また、星の色を再現したことで、約一億個の星がより本物らしくなりました。他に音響装置も入れ替えたので、音が綺麗に迫力あるものとなりました。

—解説員の皆さんは、いつごろから星に興味を持ち、どこで学ばれたのですか

解説員によってそれぞれなのですが3名からヒアリングを行いました。(ありがとうございます!)
一人目は子供のころにヘールボップ彗星を見て天体に興味を持ち、さらにSF小説好きも高じて高校では天文部に入学し天文漬けの生活をおくりました。大学では天文教育ボランティアを行っていました。
二人目は、北海道出身でよく家族で寝るがあまり星を眺めていたのもともと星に親しみがありました。その後、就職するにあたり解説員の存在を知り解説員をめざして試験を受けました。天文学は社会人になってから学びました。
三人目の解説員は、大学に入ってから星には全く興味なかったのですが、大学で天文学の研究室に入り、星を研究する面白さを知り解説員を目指しました。

—それは最後に、宇宙には宇宙人や何か生命体がいると思いますか

木島さん「思います!」

館長さん「信じています!」

このあと実際にプラネタリウムを見せていただき、お客様の反応を見ながらゆっくりお話しになる解説員さんの姿に感動しました。
他にも、天体や宇宙に関するおすすめの本や図書をお聞きしたので次で紹介します。



館長の東原さん

ゆかりの文学コーナー

『青年』森鷗外

今回ご紹介するのは、森鷗外の小説『青年』です。主人公は上京したばかりの青年・小泉純一。純粋な恋愛と創作への夢を抱きながら、現実には美しい未亡人の誘惑から逃れられず、何も書けず下宿で悩んでばかり...という内容が哲学用語(フランス語まじり)を使って書かれており、明治の青年は凄いと仰天します。ただ、この作品が書かれた1910(明治44)年、鷗外は48歳。すでに初老の鷗外が「今時の若者」にならざるを得ない青年像ではあるが...。

さて、悩める主人公が年上の友人とともに初めての「遠足」に来るが、氷川神社と大宮公園です。汽車が王子駅を飛ばして藤や浦和に停車している点も非常に気になりますが、先を急ぎましょう。...大宮公園の茶屋からは芸者遊びの音が聞こえるなど、当時の歡樂ぶりが偲ばれる情景が描かれています。騒がしさに辟易した主人公も、沼の風景には思わず「好い処ですね」と呟くのでした。主人公と友人は日が暮れるまで芸術や将来について語り合い、短くも忘れがたい印象を残す場面です。

茶屋は姿を消しましたが、水と緑に囲まれた大宮公園は今でも「好い処」です。文庫本の『青年』を片手に、改めて歩いてみませんか。
ちなみに作品に登場する茶屋の場所については『大宮の郷土史39号』所収の「大宮公園内に在った料亭・旅館」明治・大正・昭和(沼田尚道)に詳しい論考があります。大宮図書館に所蔵がありますので、こちらもぜひどうぞ。

取り扱った本
『青年』森鷗外/著/新潮文庫、岩波文庫
参考資料
『大宮の郷土史 第39号』大宮郷土史研究会/編/2020

大西民子の一首 歸らざる 幾月ドアの 合鍵の

一つを今も君は持ちあはらむか

『まぼろしの椅子』より

民子の夫が家に帰らなくなつて数か月が経つたころ、民子は「夫はこの部屋の合鍵を今も持っているのだろうか?それとも捨ててしまったのだろうか?」と考えてしまい、泣き出した。気が持たなくなつたと振り返っています。

大西民子の一首

